# 上尾丸山公園は縄文時代の環状集落
## ～畔吉・前原遺跡～

図１　畔吉・前原遺跡の測量図
環状（ドーナツ状）に住居跡が分布しているのが分かる

私たちが暮らす地面の下には、縄文時代に残された人々の暮らしが息づいている。上尾丸山公園の北口駐車場の中ほどに「畔吉・前原遺跡」と書かれた説明板がある。現在、駐車場であるこの場所に立ってみて、縄文時代の人々の生活に思いを巡らせるのもいいだろう。ここは縄文時代には、環状集落の中央広場だった。

環状集落とは、住居十数軒がドーナツ状または馬蹄形に分布している住居群のことである。集落の中心地は広場になっており、墓域や祭りが行われていた場所だといわれている（**図１**）。環状集落の起こりは定かではないが、数世代にわたり二つのグループが一定の距離を置きながら、対角線上に住居を営み続けたために、発掘調査で見つかる住居群がドーナツ状に分布したと考えられている。

畔吉・前原遺跡は、三度にわたる発掘調査によって、竪穴住居跡が四四軒確認され、住居跡が環状に分布する遺跡の範囲は、直径百メートル以上と推定されている。これらの住居跡には、中央に土器を埋設して使用した炉跡（**写真１**）が残るものなども見つかっている。

縄文時代は、今から約一万五千～約三千年前といわれているが、畔吉・前原遺跡は縄文時代のいつ頃の集落跡なのか。それは住居跡から出土した土器が教えてくれる。

この遺跡でもっとも多く出土した土器は、千葉県加曽利貝塚から出土したことから名付けられた加曽利E式というものである。粘土紐を土器表面に張り付けて表現する隆帯文という文様が特徴的なこの土器は、縄文時代中期（約四五〇〇年前）の代表的な土器である。この土器により、畔吉・前原遺跡もその時代の集落跡であることがわかる。

この時代の典型的な環状集落が見つかった例は市内には他になく、当時の人々の暮らしを伝える大変貴重な遺跡である。

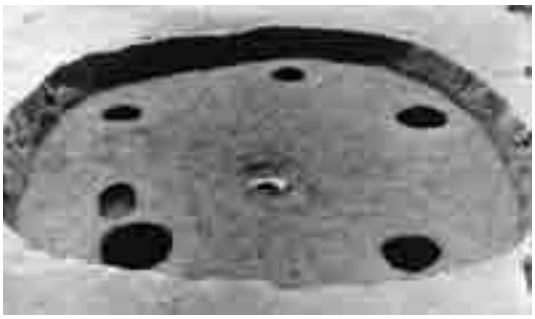

写真１　住居跡と炉跡　柱穴と中央に炉跡がある

## コラム column
### 後山遺跡の関山式土器

上尾からはかつては海が見えていた。後山遺跡は、藤波地区の藤波団地付近、荒川や江川流域の低地を望む、台地上に位置する。遺跡で人々が生活をしていた縄文時代前期（約6,500年前）は、縄文海進が最も進んだ時期であり、この遺跡の近くまで海岸線が来ていたのである。

後山遺跡では、昭和46（1971）年の発掘調査で、縄文時代前期の住居跡四軒と古墳時代後期（約1,300年前）の住居跡一軒が見つかっている。縄文時代の住居跡から出土した土器のうち、復元された３点が「後山遺跡出土関山式土器」として、市有形文化財に指定されている。この土器の発見により、この遺跡が縄文時代前期の集落遺跡であることが確認された。

関山式土器とは、蓮田市関山の「関山貝塚」から出土した土器により名付けられた、縄文時代前期の関東地方にみられる土器型式である。関山式土器の特徴は、繊維を多く含む土質や、土器の全面に紐を横方向に転がして作る、多種多様な文様にある。

写真２　後山遺跡出土関山式土器
（土器の表面全体に、縄文が付けられている）